

第1図 河北潟干拓地における1977年度の各種ノネズミ採集地点
黒丸が1977年度、白丸が1976年度の採集地点を示す。

ドブネズミ38.5%であって、ドブネズミだけは雌が少なくて、その他は大体において雌雄ほぼ同数である。

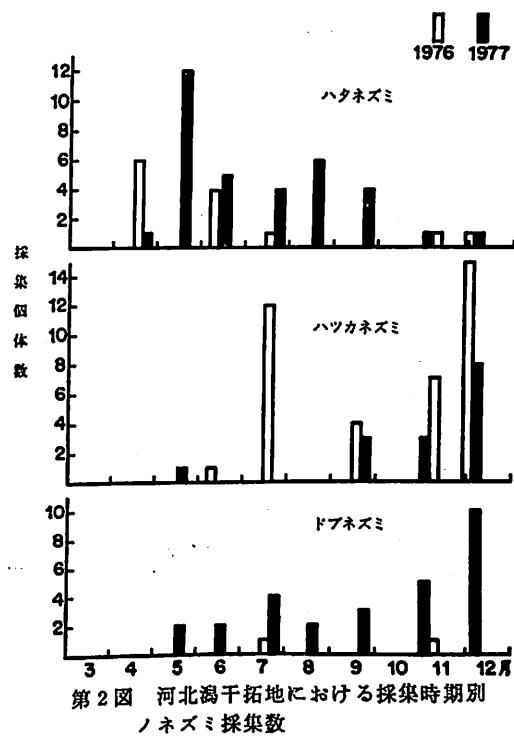
採集時期別の採集個体数をまとめて、'76年度と比較したのが第2図である。これでみるとハタネズミは春に最も多く採集され、秋になるにつれて次第にへっているのに対して、ハツカネズミ、ドブネズミは秋になるに従い次第にふえている。

考 察

1 種類構成の変化

1976年と'77年の採集結果をくらべると、つぎのような傾向が見出される。

- (1) ドブネズミの著しい増加
- (2) ハタネズミの若干の増加
- (3) ハツカネズミの減少



第2図 河北潟干拓地における採集時期別ノネズミ採集数

(2) ジネズミが採集されなかつたこと

このうち、ジネズミはもともと採集数がわずかであったために材料不足で考察ができない。また、他の三項目を検討するさいに考えねばならないことは、この両年の間でのべ設置トラップ数が403から1447と大きく増加していることである。トラップにかかる率が同じであればトラップ数が増えれば捕獲数が増えるのは当然である。この問題を検討するためには何らかの方法で生息密度を明らかにすることが最も確実であるが、今回はまだ生息密度がわかつてないので、現在ある資料だけでこの問題について考察する。

第2表 トラップ当たり捕獲率の年による変化

	ハタネズミ	ハツカネズミ	トブネズミ	総計	
1976年	捕獲数 13	捕獲率 3.2%	捕獲数 2	捕獲率 1.7%	56 13.1%
1977年	捕獲数 34	捕獲率 2.4%	捕獲数 28	捕獲率 5.1%	77 5.3%

1976年と'77年のそれぞれの種類の捕獲率を設置トラップ当たりにしてまとめて第2表に示す(トラップの型によってかかるネズミの種類にちがいがある——たとえば小型のシャーマントラップにはドブネズミはかかるない——ので、その点も配慮して算出した)。

これをみるとハツカネズミは'77年度にはトラップの

数が増えたのに捕獲数はへり、捕獲率も激減しているので、この種類の減少傾向はほぼ確かである。ハタネズミは捕獲率はややへっているが捕獲数は増えており、増減の傾向はわからない。ドブネズミは捕獲率がかなり高くなり、捕獲数は激増している。この種については'77年にはかなり増加したことを認めるのが妥当ではないかと思われる。なぜなら、今回の調査ではその調査面積は両年でほぼ同じであるため、トラップ数の増加はトラップの密度を高めたことになり、ドブネズミのように大型のネズミの場合このように比較的小さい面積（地域全体は広大であるが、各調査地のトラップを配置した区域はそれほど広くはない）の中でトラップの密度を高めただけで捕獲数がこのように激増するとは考えにくいかである。干拓地でドブネズミが多発することは八郎潟干拓地でも知られている^{2,3)}。しかし八郎潟の記録ではドブネズミは干拓後早くから増えて、12年後の1969年ごろを境にしてそれまで圧倒的に多かったドブネズミがへって、優占種はハタネズミに変わった。この点、干拓後7年目の河北潟の今回のドブネズミの増加とはかなりちがっているようにも思われる。ハツカネズミ、ハタネズミ、ドブネズミの3種が生息することは、河北潟と八郎潟の両地でまったく同様であり^{3,4)}、これらが干拓地の今後の環境変化とともにどのように変わってゆくかは、今後かなりの期間にわたって追跡調査をする必要がある。また、われわれの調査を八郎潟など他地域の調査の結果とくらべる場合、調査方法のちがいについても十分に配慮する必要がある。はじきわなを用いた八郎潟の調査と、シャーマントラップを中心としたわれわれの河北潟の調査を同じようにならべて比較することには問題があるかもしれない。

2 季節消長

捕獲数の季節的変動は第2図に示したとおりである。ハタネズミの消長と、ハツカネズミおよびドブネズミの消長がちがった傾向を示すが、これも八郎潟干拓地の調査結果と一致している^{4,5)}。しかし、1976年の結果と1977年の結果をくらべてみると、どの種類でみても'77年度には数のピークの時期がややおくれているようにみ

える。これはその間の冬の大雪のためではないかと思われるが明らかではない。また、これらの捕獲数の消長と真の生息密度との関係や、それぞれの種類の繁殖活動その他の生態(たとえば食物の種類とその増減、移動など)を明らかにすることも今後の問題である。

3 生息地選択と分布

この調査は干拓工事実施中の地域内で行なわれている関係上、周年調査の定点はなるべく工事による搅乱がない場所を選んでいる。そのため調査点が幹線排水路ぞいの部分にかたより、各定点は環境的には似通っている。そこで、この調査はいろいろちがった環境の間でのネズミの生息、活動場所の選択を見ることができず、むしろ一様な現境の広い地域において、その周辺部から内部にかけてネズミがどのように分布しているのかを調べた結果となっている。この結果として明らかになった所では、第1図でみられるように、'77年を'76年とくらべると、ハタネズミ、ドブネズミは'76年には局地的に採集されたのが、'77年にはほぼ全域で採集され、ハツカネズミはそれらと反対に、'76年には全域でとれたものが'77年には干拓地南側の半分の地区でしか採集されていない。この分布域の拡大あるいは縮小は、さきにのべた各種類のネズミの増減傾向とほぼ一致している。

生息場所に關係した観察として、ドブネズミはほとんどの個体が幹線排水路の水ぎわにしかけたトラップにかかっている。それに対してハタネズミ、ハツカネズミは水辺には少なく、やや乾燥した草地に多い。

引用文献

- 1) 大串龍一・矢島孝昭・中橋典子 (1977) 河北潟干拓地のノネズミ相 (第1報) 北陸病虫研報 25: 84-86
- 2) 秋田県農業試験場 (1968) 昭和43年度野鼠発生予察実験事業報告書. 33, 3) 五十嵐和広 (1971) 八郎潟におけるネズミ類の動態. 生物秋田15: 4-6.
- 4) 秋田県農業試験場 (1973) 昭和48年度野ぞ発生予察実験事業報告書. 9, 3) 秋田県農業試験場 (1974) 昭和49年度野ぞ発生予察実験事業報告書. 12.

(1978年4月14日受領)